

## 『シーボルトと宇田川榕菴』 高橋輝和 著 (平凡社) 225p

1823（文政6）年に日本へやってきたシーボルトはドイツ人。しかし、当時の日本の役人が来航者の国籍をオランダ語が話せるか否かで判断していたため、彼は辛くも入国に成功しました。

本書では、シーボルトの生い立ちと日本滞在中の彼の心境が語られていますが、そのシーボルトと書簡を通じて蘭学（ここでは薬学・植物学）の知識や、資料を交換し合った宇田川榕菴のことも記しています。この宇田川は薬学や植物学の知識だけに止まらず、言語学にも深い関心を持っていました。そのことは蘭学の翻訳方法を記した『蘭学重宝記』を自ら手掛けたことや、シーボルトにドイツ語で書かれた『植物学入門』の入手を懇請していたことから伺えます。さらに、「元素」や「酸素」という言葉も彼が使い始めたものだという記述も本書には載せられています。歴史だけでなく言語学に関心のある方にもお勧めの一冊です。

402.105-Tak

## 『歴史の話』 網野善彦、鶴見俊輔 著 (朝日新聞社) 180p

歴史とは実に多面的なもので、必ずしも一元的な物の見方だけでは理解できるものではありません。多面的であるがゆえに、歴史をもう一度見直す努力も人々の原点を理解する上で必要なことです。

本書は、網野善彦・鶴見俊介両氏の対談形式になっており、「歴史を多面的に見る」と「歴史を読み直す」の2部に分かれています。その中で両氏は、「日本人」という存在とは何かという疑問やアイヌと琉球民族など、各々にある「違い」を意識することの必要性を訴えています。また、この「違い」の意識を持つことによって、違った視点からの見方が可能になり、ひいては歴史について多面的な見方が出来るとも論じています。さらに、両氏は日本の学術語が明治以降、一元的な意味しか持たなくなったという問題についても紹介しており、意味の重厚性の欠如が歴史の見方にも当てはまると述べています。

皆さんがこの図書をご覧になって、歴史の見方について関心を深められれば幸いです。

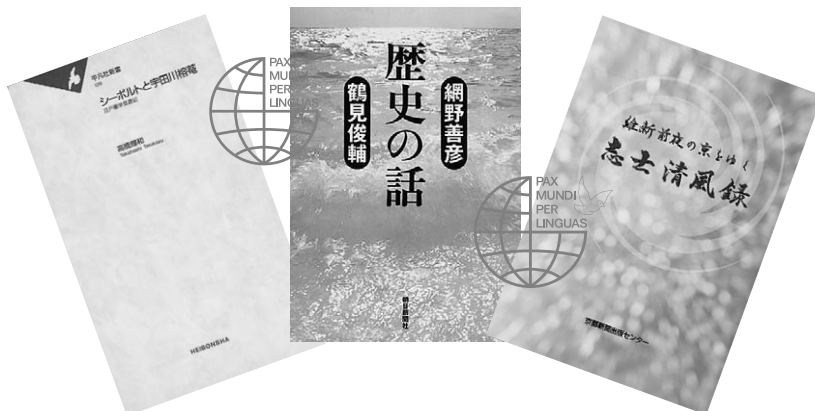
210.04-Ami

## 『志士清風録 維新前夜の京をゆく』 京都新聞出版センター 編 (京都新聞出版センター) 157p

「幕末」という時代は、ペリー来航の1853（嘉永6）年から明治政府が樹立される1868（明治元）年までの約15年間を指します。江戸時代約260年の中では実に短い期間と言えます。しかし、幕末はペリーの来航以降、安政の大獄や坂下門外の変など、数多くの事件が発生しており、江戸時代の中でも最も目まぐるしい激動の時代と言えます。

本書では、こうした激動の時代の中、京都においてそれらの出来事に関与していた志士や彼らを支えてきた人々を始め、志士たちの故郷（薩摩・長州・土佐）の様子が当時の顔写真、書簡、あるいはその当時住んでいた屋敷や部屋の写真などで紹介されています。長州志士が大勢殺された池田屋騒動、坂本竜馬が暗殺された下手人不明の近江屋事件などのエピソードも、その当時の状況を物語る建物、証拠となる刀などを交えて詳細に記されています。また、幕末の京都史跡に関する地図も掲載されており、京都についての知識を深められる読み易い構成になっています。

210.58-Shis



いなぎ ひろゆき (係)